

燒死

一自縊は首筋延び、經目くびれ込、鼻よだれをたらし、兩足江血下り、太くなり、餘人の仕業には無之。○下

〔日本書紀垂仁〕五年十月、發近縣卒命上毛野君遠祖八綱田、令擊狹穗彥、時狹穗彥與師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降。○中將軍八綱田放火焚其城。○中時火興城崩、軍衆悉走、狹穗彥與妹共死于城中。

〔日本書紀雄略〕三年○安八月、坂合黑彥皇子深恐所疑、竊語眉輪王、遂共得間而出、逃入圓大臣宅。○中

略 天皇復益與兵圍大臣宅。○中天皇不許、縱火燔宅、於是大臣與黑彥皇子眉輪王俱被燔死。時坂合部連贄宿禰抱皇子屍而見燔死。

〔太平記七〕千劍破城軍事

早リオノ兵共五六千人、橋ノ上ヲ渡リ、我先ニト前タリ、アハヤ此城○千破、只今打落サレヌト見タル處ニ、楠兼テ用意ヤシタリケン、投松明ノサキニ火ヲ付テ、橋ノ上ニ薪ヲ積ルガ如クニ、投集テ、水彈ヲ以テ油ヲ瀧ノ流ル、様ニ懸タル間、火橋桁ニ燃付テ、溪風炎ヲ吹布タリ。○中橋桁中ヨリ燃折テ、谷庭ヘドウド落ケレバ、數千ノ兵同時ニ、猛火ノ中ヘ落重テ、一人モ不殘燒死ニケリ、

〔檢使心得帳〕燒死見分

一死體を火中江入燒死に紛申候而も、死體故燒ケあしく、いきかよふ者を火中江入候而は、口鼻目々血しる出、くすぶり燒がたし、依之死無相違。

〔倭訓栞中編〕二十五○みなげ。水に投じて死するをいふ

〔日本書紀仁德〕四十一年○應二月、譽田天皇○應崩、○中大山守皇子○中會明詣菟道將渡河、時太

子○菟道服布袍取檝櫓密接度子、以載大山守皇子而濟、至于河沖、詭度子蹈船而傾、於是大山守皇

子墮河而沒、更浮流之。○中然伏兵多起、不得著岸、遂沈而死焉。

水死